

氏 名	藤原 克美	
学位の種類	博士（経済学）	
学位記番号	第 5934 号	
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 21 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者	
学位論文名	移行期ロシアの繊維産業 ―ソビエト軽工業の崩壊と再編―	
論文審査委員	主 査 教 授 田畑 理一	副 査 教 授 大島 真理夫
	副 査 准教授 森脇 祥太	

論文内容の要旨

ソ連崩壊後のロシアの歩みは、体制としては社会主義から資本主義への移行、経済的には計画経済から市場経済への転換として理解されるが、いずれにせよ内部に摩擦や対立を抱えた長期的プロセスであった。移行期研究のなかでは、資本主義制度の新たな育成・確立への関心が圧倒的に高く、旧体制の消滅は明示的には扱われてこなかった。しかし、制度形成が長期的プロセスであるならば、既存制度の崩壊も長期的な過程であり、忽然と消滅するものではない。本論文の最大の特徴は、移行過程を、ソビエト経済体制の変化のプロセスとして捉えている点である。

本論文は、繊維産業を具体的事例としてソビエト経済体制の変容を論じる。繊維産業はソ連崩壊後に最も大きな打撃を被った産業の一つであったが、鉱工業生産が縮小傾向にあった 90 年代においては、繊維産業はロシアを代表する産業であったと言えよう。すなわち、繊維産業の衰退過程は、ソビエト経済体制の崩壊過程を体現していたと考える。

ソビエトでは、計画経済のもとで、市場原理とは乖離した産業構造と、ソフトな予算制約につながる温情主義的行動様式が形成されていた。市場経済の導入によって産業構造はドラスティックに変化し、そのなかで繊維産業は産業内での比重を下げ続け、恒常的に労働力の供給源の地位にあった。各経済主体に埋め込まれたソビエト的な行動様式も根強く残ったが、それでもかつての省の影響力は次第に低下し、伝統的な大企業は破産を幾度となく経験し、その都度救済を受けながらも衰退傾向にある。このように、産業構造と経済主体の行動の変化を辿ると、ソビエト経済体制は、1990 年代に急速に変容し、この 20 年間でほぼ崩壊したと見ることができる。

実際、1999 年以降の経済成長の中では、ロシア経済の明るい局面が強調され、ソビエト経済体制の諸特徴も消え去ったかに思えた。しかしながら、再び危機へと転じた 2008 年以降ロシア政府は、企業の存続にかかわる究極的な局面で資金供与やリスケジュールなどの救済措置をとった。90 年代ほどの規模ではないが国家による未払いも発生した。したがって、伝統的な企業の市場からの退出が国家によって阻止される点と、金融規律の緩みという、ソビエト経済体制のまさに根源的な部分は、僅かながら残されていることをつけ加えねばならない。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ソ連および新生ロシアの経済における繊維産業のあり方および繊維産業に関する政府（中央、地方）の政策、諸制度についての研究であり、ソ連崩壊以後の約 20 年間のロシア繊維産業の詳細な研究である。それと同時に、繊維産業を例としてロシアにおける破産法（92 年制定、98 年改定、2002 年改定）の紹介と研究を行い、現実のロシア経済における破産法の適用と運用が産業再編プロセスとして有する意義を示した調査・研究でもある。

本論文の特徴と意義は次のようなものである。

まず第 1 に、ソ連時代の企業と政府のあり方の基本についての理解としては、ハンガリーのヤーノシュ・コルナイの社会主義経済分析のキー概念である「パターナリズム（温情主義）」と「ソフトな予算制約」とし、それが新生ロシアにおいても根強く残存し続ける状況を繊維産業のあり方の考察を通して詳細に跡付けた。ソ連時代、移行期初期（98 年 8 月危機まで）、8 月以後の好況期にわけて、

繊維産業に関して、政府、中間管理機関、業界団体、地場産業地域、企業の相互関係を跡づけている。

第2に、新生ロシアとなってからの移行過程、とくに1990年代前半の転換不況を背景に、政府、企業が生き残りを最優先とされ、破産させるという措置はほとんどとられなかったが、その状況を破産法の制定と改定（92年、98年、2002年）、その運用の考察を通して浮かび上がらせ、詳細に分析した。このような考察の意義として、社会主義時代のソ連における企業がいわゆるパターンリズム的環境におかれながら、非効率的体質をもっていたのを、移行過程において企業を経済的・競争環境におきながら効率化を迫るのか、あるいは破産法により業界に対して企業精算によるスクラップアンドビルドを迫るのかという観点から考察するという視点を明確にしていることである。

第3に、歴史的には、経済開発において繊維産業がリーディング・セクターとしての意義をもちながらも、開発の過程で急速に斜陽化する運命にある点を念頭に置きつつ、社会主義時代からのゆがみ（その結果が低品質、低生産性、高コストである）の残存や移行期ロシアの繊維産業での新制度の出現について考察を加えながら、繊維産業を通してロシア製造業、さらにはロシア経済のあり方を検討していることである。

第4に、ソ連とりわけロシアの繊維産業についてのほとんど唯一の研究であり、ロシアの繊維産業の中心地であるイバノボ（正確にはイヴァノヴォと呼ぶ、英語表記では **Ivanovo**）市をたびたび訪問し、ヒヤリングを重ねるとともに、繊維業界の業界誌（10種類を超える）、業界紙、ビジネス誌にも目を通し、英語文献をも参照して、きわめて綿密な調査研究をおこない得ている。

全体としては、マクロ経済レベルの動向との関連での繊維産業の動向、繊維関連企業の経営状況への配慮が弱やや弱いこと、その結果、繊維産業の競争力への配慮すなわち崩壊傾向の過度の強調が見受けられるが、本論文がロシアの繊維産業および繊維関連企業についての包括的な研究に考察の主として焦点を絞っていることを考慮すれば、特に問題であるとは言えない。

総じて、藤原氏の本論文での研究は、ソ連、ロシアの繊維産業のあり方と変遷、および市場経済への移行初期の不況期、98年「8月危機」移行の好況期における繊維産業界における産業構造の変遷について綿密な調査研究を行い得ており、移行期においてもソ連時代の制度、慣習の根強い残存がみられることを克明に跡づけるとともに、繊維産業、企業の変容の過程に考察を加えており、きわめて意義深い研究となっている。ロシアにおける破産法の改定についての紹介と実際の適用状況の考察などは、体制の移行との関連での破産法の研究として、我が国でもほとんど唯一の研究であり、高く評価できる。

以上に見られるとおり、藤原氏の本論文での研究は高く評価することができ、博士論文に値するものと判定しうる。